



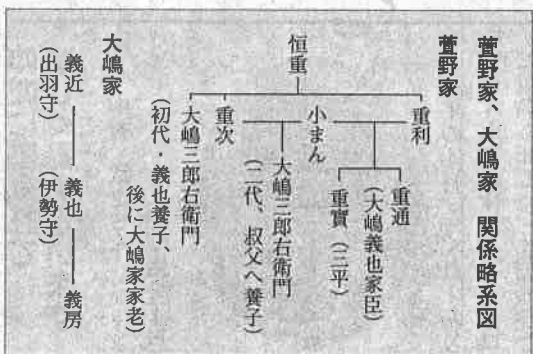
「忠臣蔵三百年」48番目の義士 菅野三平重實 ⑧

自刃(1)

仇討ちの急進派であつた菅野三平は、赤穂城の開城後に菅野村の実家へ帰つた後も、家老の大石内蔵助や同士たちと連絡を取り合いながら、今か今かと仇討ちの日を待っていました。赤穂浪士四十七士が討ち入りした元禄15(1702)年12月のおよそ1年前に、三平は同士たちと合流すべく江戸へ向かおうとしましたが、父・重利は、三平が仇討ちに加わつた場合に、赤穂へ三平を推挙した旗本大嶋家や、大嶋家に仕える三平の兄・重通にも罪が及ぶことを心配し、強く反対しました。

このことから、父への「孝行」と主君への「忠義」の板挟みになつたために、三平は苦悩のあぐく自刃したと伝えられていますが、三平が自ら死を選んだの

は、果たしてそれだけの理由だつたのでしょうか。
まず、父・重利が迷惑がかることを心配した大嶋家と菅野家の関係は、単純な主君と家来の関係だつたのでしょうか。



大嶋家
義近——義也——義房
(出羽守) (伊勢守)

三平が自刃した当時、大嶋家では三平を浅野家へ推挙した義近(出羽守)がすでに亡くなり、その子義也(伊勢守)の代に替わっていました。一方、菅野家では、重利が隠居し、重通が父の跡を継いで大嶋家へ仕えていました。大嶋義也は、長崎奉行の要職にありましたので、重通も長崎に赴任していました。
一説では、仇討ちの決心をした三平に対して、重利と一緒に重通も強く反対したことも、三平の死の原因になつたと伝えられています。重通は長崎にいた可能性が高く疑問が残ります。

それよりも注目されるのは、もう一人の兄・大嶋三郎右衛門(二代目)が、大嶋家の家老という要職にあつたことです。前に8月1日号で述べましたが、前年(元禄14年)6月に三平は、美濃国の三郎右衛門のもとに1カ月の長期にわたり滞在しました。三郎右衛門は、三平とは父が違ふものの母が同じですので、実の兄にあたります。大嶋家の養子となつた叔父の初代・三郎右衛門の養子となり、家老職を継いでいました。三平に対して大きな発言力を持つていたと推測されますので、三平自刃の最大の理由が大嶋家への配慮であるとすれば、最も重要な鍵を握つていたのは兄・三郎右衛門ではなかつたでしょうか。

余談ですが、もし三平が討ち入りに参加していた場合、大嶋家に何らかの迷惑がおよんだのでしょうか。討ち入り後に切腹した赤穂浪士の遺児のうち、男子は島流しや出家などの罪を受けましたが、女子やその親兄弟には何ら処分がおよびませんでした。大嶋家への迷惑を考えて、討ち入りに反対し三平を死に追いやつたとされる重利は、討ち入りの4カ月前にこの世を去っていました。残された菅野家の人々は、この処分を知つたとき計り切れぬ無念や新たな悲しみに包まれたことでしょう。